

「居場所のなさ」についての研究

中藤 信哉

京都大学大学院教育学研究科紀要 第58号

2012

「居場所のなさ」についての研究

中藤 信哉

1. はじめに

近年、居場所についての重要性が唱えられ、盛んに研究が行われている。居場所が重要視され始めたのは、1980年代に顕著になった不登校児童・生徒をめぐる問題に端を発しており、そうした不登校の問題に対処する上で、1992年には文部省（当時）が、学校を生徒の心の居場所にする必要性を指摘した（文部省，1992）。それ以後、居場所について多くの研究が行われるようになり¹、居場所の構成概念についての研究や、発達的变化、精神的健康やその他の心理的特性との関連などに関して、知見が積み重ねられている。

このように、居場所についての研究が起こってきたそもそもの始まりを考えると、不登校児童・生徒の「居場所のなさ」と呼べる状況があった。こうした居場所の問題について対処していく上でも「居場所がない」と表現される現象は、どのような現象であり、そこで個人にとってどのような事態が生じているのかを考慮することが重要であると思われる。しかし、石本（2009）が「どのような要因で『居場所がない』といった感覚をもつようになるのかについては明らかにされて」いないと指摘し、「居場所がない」という感覚に結びつく要因を明らかにする必要性を指摘しているように、「居場所のなさ」に関してはこれまで十分に扱われているとはいいがたい。

2. 本研究の意義と目的

「居場所のなさ」について考察する意義はどのようなものが考えられるだろうか。

第一に、居場所ということに関して、個人に実感されるのは「居場所がない」という感覚であることが挙げられる。北山（1993）は、「居場所とは、いつも失われてはじめて『ありがたさ』が分かるという類のものなのである」と述べており、居場所があるときには、個人にとって居場所の存在は意識されないが、居場所がなくなって初めてその存在が意識されるという性質を指摘している。荻原（2011）も同様に「居場所それ自体が、安定した日常においては意識の後景に退いて、前意識レベルで支え、働いているからこそ、喪失という形によってしか意識し得ない」と述べている。このように、居場所ということが個人に意識されるのは、居場所が失われるという事態においてであり、その際個人における実感は、「居場所がない」という形をとる。つまり、主観的な現象として初めにあるのは「居場所のなさ」なのである。個

¹ こうした居場所研究については杉本・庄司（2007）や、石本（2009）の優れたレビューがある。

人の主観的体験を重視するならば、「居場所のなさ」について考察することには意義があると考えられる。

第二に、心理臨床の実践において、クライアントの抱えるテーマとして「居場所のなさ」がある場合が少なくない。妙木（2003）は、「悩んでいる人や問題を抱えて困惑している人、混乱している人、彼らが最も危機的に世界を感じたり、思っていたりする背景にあるのは、この『居場所』感覚」であり、「そうした感覚を失っている状態をいかに取り戻すか、あるいはいかに取り戻すめどをつけるかが、心の治療の非常に大切な第一歩になる」と述べている。同様に富永（2006）も「臨床の場に現れる人の多くは、『いる』こと自体が困難だったり、『本当の自分』が『いる』ことに困難があったりするなど、何らかの意味で『居場所』を失っている人たちと言えるのかもしれない」としている。面接の場においても、クライアントから「居場所がない」という言葉が発せられるのは稀ではない。このように、「居場所のなさ」は臨床場面においても重要な意味を持つテーマであると考えられる。

「居場所」が日常語であり、多義的であるのと同様、「居場所がない」という表現もまた多義的であり、その言葉を発したクライアントの数だけ意味があるとも言える。しかし、そのような個別性を備えながらも、ある程度言語的な意味が共有されている言葉で表現されている以上、何らかの共通性も存在すると考えられる。そのような共通性や一般的性質について明らかにすることは、「居場所のなさ」を抱えるクライアントを理解し、かかわっていく上での視点を提供することになり、意義があることだと思われる。

本研究においては、「居場所のなさ」の基本的な性質に関して、主に理論的な見地から検討し、その性質を明らかにすることを目的とする。

3. 居場所のなさについての先行研究

本節では、これまでの研究において「居場所のなさ」がどのように扱われてきたのかについて概観する。なお、これまで述べたような本研究の問題意識、すなわち、「居場所」に関しては主観的現象として「居場所がない」という感覚が初めにあるという視座に立ち、「居場所のなさ」を直接扱っているものを中心に挙げていく。

（1）「居場所のなさ」の感覚の構成条件についての実証的研究

堤（2002）は、「居場所がない」という感覚に着目し、「居場所がない」感覚の因子として、「自分が周りの人たちから疎外されているという感覚」を中心とした「対他的疎外感」、「自己にむけられた否定的な感覚」である「対自的疎外感」を見出している。すなわち、堤（2002）においては、「居場所のなさ」の感覚は、他者との関係についての意識と、自己自身についての感覚から構成されている²。中村（1999）は、「居場所がある」と感じられる状況と「居場所がない」と感じられる状況との比較を行い、「居場所の感覚が安定するためには、『ウチ—中間領域—ソト』という空間構造と、『自分—なじみのある他者—なじみのない他者』と

² しかし、石本（2009）が「因子構造について再検討が必要なものであると考えられる」と指摘しているように、「居場所のなさ」の感覚について説明するには十分であるとは言いがたい。

いう対人構造とが、それぞれ対応していることが重要である」と述べ、「なじみのない他者がウチ化された領域に侵入してくるとき、あるいは、自分が他者の領域（ソト）に放り出されるとき、空間の安全性は確保されなくなり、『居場所がある』という感覚は消失してしまう」としている。中村（1999）においては、「なじみ」という視点からみた対人構造と、「ウチ—中間領域—ソト」という空間構造の対応という観点から「居場所のなさ」について考察されている。則定（2006a）も、中村（1999）を参考に、思春期の中学生を対象に調査を行い、対人状況と、空間に対する認知の仕方が、「居場所がない」と感じることに影響していると述べている³。堤（2002）が「居場所のなさ」の感覚について扱っているのに対し、中村（1999）や則定（2006a）は「居場所のなさ」を感じる状況の構造についての研究であるため、厳密に同じものについて扱っているわけではないが、共通しているのは他者との関係という対人関係的な要素であり、異なる点として、堤（2002）においては特に自己自身についての否定的な感覚が抽出され、中村（1999）や則定（2006a）においては心理的な空間構造に着目がなされている。

（２）「居場所のなさ」と精神的健康や心理的特性との関連についての実証的研究

居場所についての実証的研究の文脈では、居場所がある感覚を「居場所感」として概念化し、尺度を作成することで数量的な研究に用いられている。居場所感と精神的健康の関連を扱ったものとして、例えば則定（2006b）は、思春期における居場所感と抑うつ感の関連について検討しており、父親、母親、親友、恋人に対する居場所感と抑うつ傾向との間に負の相関を見出している⁴。

一方、杉本（2010）は「居場所環境」という視点から、中学生及び大学生における、居場所と精神的健康について実証的に研究し、特に「家族という居場所」のあることが中学生の精神的健康との関連が深いとしている。

居場所の有無と心理的特性の関連については、アイデンティティとの関連についての研究がいくつか見られる。先に挙げた堤（2002）は、居場所がない感覚とアイデンティティの混乱の度合いとの関連を検討し、居場所がないという感覚の中核にはアイデンティティの混乱があると述べている。高橋・米川（2008）においても、アイデンティティの確立度と居場所感覚の関連を実証的に検討し、居場所がない状態がアイデンティティの確立度が低い状態を反映していることが示されている。また、杉本・庄司（2006）は大学生の居場所環境の有無とアイデンティティの関連について実証的に検討し、どのような居場所環境を持つかが、アイデンティティの諸側面の確立度と関連していると述べている。こうした居場所とアイデンティティの関連についてのなされた研究においては、「居場所がない」という事態あるいは感覚と、アイデンティティの混乱との関連が指摘されている⁵。更に、杉本・庄司（2006a）

³ 「居場所がない」では“自己と他者が心理的・物理的に切り離された状態での反応が多”く、また“具体的な空間に「知らない」という認知が加わっていることが読み取れ、場所や人への馴れが心理的居場所の有無に影響を与えているのではないかと推測される”と述べている。

⁴ 則定（2006b）の居場所感尺度は「〇〇と一緒にいると、ホッとする」など、他者との関係を中心に測定する尺度となっている。

⁵ この他にも、実証的研究ではないが、実存的視点からアイデンティティと居場所の関連を検討した小沢（2002）

は、大学生の時期に居場所がないことよりも、中学生の時期に居場所がないことの方がアイデンティティの混乱度合いとの関連が深いことを指摘している。「居場所のなさ」は、現在においてのみ個人に影響を与えるものではなく、後になって居場所が獲得されたとしても、一時期の「居場所のなさ」が長期に渡って個人に影響を与える可能性がある。

これらの知見を踏まえれば、個人にとって居場所がないことは、精神的な健康への悪影響や、アイデンティティの混乱と関連があることが推測される。「居場所のなさ」を抱えるクライアントに対応する上で、これらの視点は重要なものである。ただし、「居場所」の有無や感覚が、精神的健康やアイデンティティと一様に関連しているのではない点には留意すべきである。

(3) 「居場所のなさ」についての心理臨床領域における研究

心理臨床領域において、「居場所がない」という観点から行われた研究として、廣井(2000)が挙げられる⁶。廣井(2000)は非行青年との事例理解において、「客観的な事例理解としてはアイデンティティに混乱があると判断した場合においても、治療のかかわりを考えるうえでは「居場所がない」という理解に置き換えて関わったほうが面接が自然に進む場合が多いのではないか」と述べており、臨床実践における「居場所がない」という視点の有用性を指摘している。西村(2000)は「心の居場所」がない重症心身障害者への集団心理療法、及びコラージュ療法過程について触れている。西村(2000)においては、「心の居場所」のなさは、自身の内面や心情を表現し、受け止めてもらえる場がないことを指しているように思われる。また、重症局所進行乳癌患者の受診遅延理由の背景に居場所感のなさがあると指摘した中原(2002)の研究などもある⁷。

妙木(2003)は、心理臨床の場を訪れるクライアントの背景には、居場所があるという感覚が失われている状況があるとし、そのような感覚をいかに取り戻すかが、治療の重要な第一歩であるとしている⁸。妙木(2003)はまた、居場所を支える基盤として生物的、経済的、社会的な基盤の重要性にも触れ、そうした基盤が失われ、居場所を失った極端な例として、自殺、児童虐待、統合失調症を挙げている。ここでの「居場所のなさ」とは、拠り所や生物的基盤の喪失ということを比喩的に表現しており、自殺や児童虐待などの問題について、居場所という観点から考察し、それらの問題への理解に関して新たな視点を呈示している。

これら心理臨床領域の研究においては、クライアントの顕在化している問題や症状の背景として「居場所のなさ」が考慮されており、そうした「居場所のなさ」という観点からクライアントや事例経過の理解を試みることにより、より治療的に意義のある理解やかかわりが

2003)の研究があり、小沢は、居場所があるということとアイデンティティが形成されていることは密接に関連していると述べている。

⁶ 廣井(2000)においては、「居場所がない」については明確な定義はなされていないが、「居場所がある」を「自分自身でいることが受け入れられていると感じられること」と定義しているため、「居場所がない」という場合は「自分自身でいることが受け入れられていないと感じること」を意味していると考えられる。

⁷ この他、事例理解に「居場所がない」という観点が含まれるものとして、例えば田村(1996)や岡田(1998)、矢幡(2003)、鈴木(2005)があるが、これらの研究においては「居場所のなさ」は明確に定義されていない。

⁸ 妙木(2003)は、「心の居場所」を、安心していられるところであり、自分らしく一人でいられるところであるとしている。

できる可能性が指摘されている。その一方で、「居場所のなさ」という概念については、共通の定義があるわけではない。

北山（1993）は、「居場所」を「自分が自分であるための環境」だとしている。そして「自分⁹」と「居場所」の関連について述べる中で、『自分がない』の代表的な理由として挙げられるのが、居場所がない、身の置き場がない、といわれる『場』『居場所』の不在のことである」と述べている。では「居場所のなさ」と「自分のなさ」の関連は具体的にどのようなものなのか。北山（1993）における居場所のなさとは、個人を「抱える環境」がないことを意味している。抱える環境は「本当の自分」が「居ること」を保障するのであるが、環境が「本当の自分」が「居ること」を抱えることに失敗すると、「自分で自分を守るために、そして自分で自分を抱えるために、自分のための防衛システムを発達させねば」ならない。この「防衛システム」とは、Winnicott, D. W.（1965）の偽りの自己と重なるものである。

環境によって抱えることに不十分な点があったとき、「本当の自分」は「居ること」が困難となり、防衛的な形式の「偽りの自己」を幼児は発達させることになる。Winnicott, D. W.（1965）が「本当の自己が現実感をもつのに対して、『偽りの自己』の存在は、非実在感や空虚感という結果に終わる」と述べているように、「偽りの自己」と「本当の自己」の乖離が大きくなり、「偽りの自己」が絶えず前面に出てくるようになると、個人の生は実在感、存在することの実感のない空虚なものとなる。このように、抱えることの失敗によって、つまり「居場所がない」ことによって、「本当の自分」が「居ること」が困難となり、実在感のない空虚な「偽りの自己」が発達していく。こうした事態が「自分がない」という感覚につながるのだと考えられる。

以上、「居場所のなさ」についてなされた研究を概観した。「居場所のなさ」とは、対人関係における疎外感や、ウチカソトかといった空間構造の混乱に関連して生じる感覚であり、抑うつ感をはじめとする精神的健康やアイデンティティの混乱と関連している。更に、自殺や児童虐待などの深刻な臨床的問題の背景にもなりうるものであるということが確認された。また、「居場所」が「抱える環境」として捉えられるとき、「居場所のなさ」は「抱えることの失敗」を意味し、「本当の自分」が「居ること」が困難となり、「自分がない」という感覚につながっていく。

しかし、上記の知見では、「居場所のなさ」がいかなる事態であるかについて十分説明されているとはいえない。「居場所」とは文字通り個人が「居る」場所であると考えれば、「居場所がない」状況とは、「居られる場所がない」「その場に居られない/居づらい」と個人に実感されている状況である。したがって、「居場所のなさ」について考察する際、どのような事態が、個人に「その場に居られない」と実感させているのかということについて検討が必要がある。つまり、個人の「居ること」がいかなる事態をこうむっているのかについて明らかにする必要があると考えられる。この点に関しては、これまでの研究ではほと

⁹北山（1993）は「自分」を「人生と言う生き方の歴史的積み重ねの延長上で、自分と言う領土、つまり自らの「分」をえて中身を抱えながら、現在も生きているこの生き方の主体のこと」であり、「『自分』とはいつも具体的なものの」であるとしている。

んど扱われておらず、北山(1993)やWinnicott, D. W. (1965)において、抱えることとの関係において述べられているが、抱える環境の役割に力点が置かれており、個人にとっての「居ること」は環境側から受動的に抱えられるという側面が強調されているように思われる¹⁰。しかしながら、主観的現象としての「居場所のなさ」を考えた時、個人の主観において、「居ること」がどのような事態をこうむっているのかについて考慮する必要がある。そこで以下では、特に「居ること」の主観的な次元に着目しながら、「居場所のなさ」について検討していくこととする。

4. 在ることと居ること—身体の視点から—

本節では、「居場所がない」とき、個人の「居ること」についてどのような事態が生じているのかについて検討する。このとき、「居場所がない」という表現がなされることを出発点にして考察していく。

「居場所がない」とは、文字通り“〈私〉が居ることのできる場所がない”と個人に主観的に感じられているということである。しかしながら、このとき個人は物理的・客観的にはある空間に存在している。家族が集まる部屋であったり、学校の教室であったり、あるいは一人になれる自室など、一定の物理的空間に個人は存在しているのである。にもかかわらず、個人は「居場所がない」と表現する。つまり、ここでの「居場所」とは、物理的な空間とは質的に異なるものが意味されている。個人が所属する家族や学校など、ある程度まとまりをもった集団や場所、あるいは、個人が生きる日常世界など様々ではあるが、物理的・客観的な空間ではなく、個人が主観的に「場」として切り取った環境や領域があり、その場所に居ることができない、居心地が悪いという事態が、「居場所がない」という表現が一次的に意味しているところと考えられる¹¹。個人が家族という場を切り取れば、「家には居場所がない」という表現がなされるであろうし、学校をひとつのまとまった場として切り取れば、「学校には居場所がない」ということになる。あるいは個人が生きるこの世界を場として意識すれば、「どこにも居場所がない」ということになる。

このとき、居場所がないと感じられる場にも個人は“物理的・客観的には存在している”、という、一見逆説的な事態が生じている。その空間に“存在している”からこそ、「居場所がない」という表現がなされる。個人がいない領域、あるいはこれまで行ったことのない領域についてはそもそも「居場所がない」という表現はなされない。この逆説的な状況をどのように理解すればよいだろうか。

このように考えるとき、“存在している”と、“居る”は性質が異なるものであると考えられる。つまり、前者はその空間に、物理的・身体的自己として存在しているということであり、後者は、個人が切り取った場に、自分という意識あるいは〈私〉として居ることを指してい

¹⁰ もちろん、Winnicott, D. W. や北山は、特に乳幼児期の絶対依存の状態を念頭に述べているのであり、この時期においては、環境側から抱えられることで「居ること」が保障されるという受動的なあり方をとる。環境から抱えられることにより、幼児に、「居ること」の連続性が形成される。(Winnicott, D. W., 1965)

¹¹ このように、居場所が物理的な空間ではなく、主観的な要素が大きく影響する環境であるということは、「居場所の主観的条件」(例えば住田, 2003)という形で、既に多くの論者が述べている。

る。こうした差異を用いて、「居場所がない」という事態をあえて表現するならば、“身体は在るが〈私〉は居られない”ということになる。居場所があるとき、あるいは居心地が良いときは、身体が在ることと私が居ることの間に齟齬はない。“身体も在るし、〈私〉もその場に居る”のである。しかし、居場所がないとき、居心地の悪いときは、身体が在ることと〈私〉が居ることの間に齟齬が生じる。〈私〉は、主観的に切り取ったその場に居ることに困難を感じているのであるが、身体次元ではそこに在らねばならない。居場所のなさ、あるいは居心地の悪さは、身体があるからこそ生じてくる感覚であると言える¹²。ここにおいて、すなわち、「居場所がない」と感じられる状況において、個人に問題となっているのは〈私〉として「居ること」だけではない。物理的身体として「在ること」が同時に問題となっているのである。

通常、人間を初めとする生き物については、「居る」と表し「在る」は用いられない。木村（1994）は、この「居ること」と「在ること」の違いについて、次のように述べている。

人間は「イル」ものであって「アル」ものでないという理解は、事態の非常な単純化ではないのか。「イル」ということが言えるのは人間や動物、あるいは擬人的に見られた存在者だけについてだけだとしても、それらの存在者は「イル」ことができると同時に「アル」こともできるのではないか。人間とはむしろ「イル」と「アル」のはぎまで、この両存在様態が織りなす微妙な関係の——ということとはつまり必然と偶然との決して相互排他的でない関係の——戯れに玩ばれている存在ではないだろうか。

木村によれば、「在る」とは偶然性の領域に属する交換可能な形での存在のあり方であり、「居る」とは個別的で必然的な相のもとに存在することを意味する。人間は「居る」という仕方ですらを必然性の相のもとに、つまり、交換不可能な自己同一性を備えた存在として実存的に生きようとする。しかしながら、「身体と言うかたちはひとつの悲劇的な矛盾を引き起こす。身体を所有するということは、物体としてアルということである。…生物は身体を有することによって偶然性の領域に曝されることになる。…身体を有することによって、生物は必然と偶然、イルとアル、個別と特殊の二重構造を生きなくてはならなくなる」のである（木村，1994）。そして、特に、統合失調症的な人は「居る」と「在る」の区別が元来それほど明確でなく、それゆえに、「他者との関係の中の偶然性の中で自己の必然性を生きることが苦手」であり、「われわれの相互主体的な『生活世界』に居場所を見出すことは困難となり、生活世界は彼らにとって居心地の悪いものとなる」（木村，1994）。

我々は「在る」と「居る」の二重の存在様式を本質的には生きながら、普段は自分のこと

¹² しかし、例えばインターネット上でのコミュニティサイトなどにおいても、そのサイトを閲覧している〈私〉が「居場所のなさ」や「居心地の悪さ」などを感じることはあろう。そこにはもちろん〈私〉の身体は実際には存在しない。このことについてはどのように考えればよいだろうか。詳細な検討は今後の課題とせねばならないが、“ネット空間”、“ネットサーフィン”というような言葉に象徴されるように、インターネットがある種の空間性を備えており、その空間を閲覧することが“サーフィン”という身体的な動作で表現されていることは示唆的である。空間性を備えたものに対しては、空間的に存在する身体を用いたメタファーを使用することが可能となる。イメージの水準で、ある意味身体的にインターネットの空間に存在することは可能となろう。

を「在る」ものではなく、「居る」ものとして捉えている。そこには暗に、自分の存在が必然的なものであり、交換不可能な自己同一性を備えた存在であるという「虚構」(木村, 1994)が含みこまれている。しかし、居場所のなさや居心地の悪さを感じるとき、“その空間に身体は在るが、その場に〈私〉は居られない”という形で、二つの存在様式の揺らぎが前景に出てくるのではないか。〈私〉という存在の個別性が自明のものではなく、自身が他者となら差異のない、なんら必然的な意味のない交換可能な存在である可能性に直面させられるのではないだろうか¹³。これは〈私〉の実存にとって危機的な状況である。その際〈私〉は、どうにかして「居る」というあり方を取り戻さねばならない。

5. 一人でいる居場所について

ここまで「居場所のなさ」について考察してきたが、上記では他者と織りなされる場としての居場所が想定されている。しかし、これまでなされてきた、居場所についてのいくつかの実証的研究(例えば杉本・庄司, 2006)で指摘されているように、居場所には、他者という居場所の他に、自室など自分一人でいる居場所も存在する。この自分一人でいる居場所について、つまり、本論の主題で言えば、自分一人でいる居場所がないことについて、どのように考えればよいだろうか¹⁴。

一人でいる状況は、他者の不在をその特徴とする。木村(1972)が「自分」について「具体的には自分と相手との間にそのつど見出され、そこからの『分け前』としてそのつど獲得されてくる現実性」だと述べていることを考慮すれば、他者が不在である一人での状況では、個人は「自分」という意識が立ち現れていない状況であると考えられる。この「自分」という意識が立ち現れていない状況においては、先に述べたような物理的・身体的な自己と、実存的な〈私〉という意識の齟齬は生じ得ず、「居る」と「在る」の間での揺らぎも生じないと考えられる。つまり、〈私〉の個別性や必然性、実存といった事柄が、一人で居るときにはあまり問題とならない。また、実際に他者との接触がないことは、実際的な対人的葛藤も生じ得ない。先に挙げた統合失調症者の困難への対処として「他者との共同体的な関係を最大限に回避して自らを孤高の極点に置くというのも、ひとつの有効な方策でありうる」と木村(1994)が述べているように、このような一人で居る状況は、個人にとって、様々な葛藤状況を回避する避難所としての居場所の性質があると考えられる。

では、そのような「一人でいる居場所」がないという事態は、どのような事態であろうか。このことを考えるとき、Winnicott, D. W. (1965)の「一人でいられる能力」との関連において考察することには意義があると思われる。Winnicott, D. W. (1965)によれば、「一人で

¹³ 荻原(2011)も「生かれた身体」という観点から居場所について考察する中で、『私』が不特定多数の一般世界の中に取り込まれていくとき、つまり『私』が交換可能なモノの世界に凌駕されていくとき、生かれた身体としての『私』はますます閉じられていかなるを得ない」と述べている。

¹⁴ 「居場所」とは、本質的にはその場が個人にとって自分が居られる場所と感じられるかという主観的な条件が、極めて重要となる概念である。一方で、ここで述べるように、「他者といえるか、一人でいるか」という客観的な条件も、質的に差異があることが指摘されており(例えば杉本・庄司, 2006)、無視することはできない。「居場所がある(居場所がない)」という感覚は、個人の内的・主観的なものであるが、現実的にはそれは客観的な場と結びついた形で実感されることが多く、それゆえ、「居場所」という概念は、主観と客観の間に成立するような概念であると言えるかもしれない。

いられる能力」は、母親と幼児が互いにそばにいつも、互いに一人にいるという体験を基盤に生成されるものであり、この能力が獲得されるためには、この体験に先立って、まず母子関係がしっかりと確立されている必要がある。逆に言えば、「一人でいられる能力」が獲得されていない場合、そこには母子関係の形成途上における何らかの失敗や、幼児が母親とそばにいつも互いに一人で居る体験が十分になされなかった可能性が考えられる。つまり、安定して一人にいるという状況は、早期の母子関係を基盤とするものであり、決して自明に成立する状況ではない。それを端的に例示するのが、統合失調症者の幻覚や幻聴であろう。統合失調症者が仮に一人で居たとしても、幻覚・幻聴という形で、他者の姿や声が、彼の世界に侵入してくるのである。「自分一人での居場所」が個人において成立するためには、「一人でいる」ことが可能である必要があり、逆に言えば、「自分一人での居場所」がないということの背景には、その個人にとって、「自分一人での居場所」が持てないこと、つまり、自分一人でのいることが困難である可能性がある。

ただし、住田（2003）が述べているように、個人が「自分一人での居場所」しか持たない場合、それはひきこもりなどの問題へつながっていく可能性がある。一人でいる居場所がないこともある種の問題が存在している可能性を示すが、一人でいる居場所しかない場合もまた、病理の可能性を示しているものであり、一人でいる居場所の有無が個人にとってどのような意味を持つかについては、更なる検討を要する。

6. 本研究のまとめと限界

本研究においては、近年重要性が認識され、盛んに研究が行われている「居場所」に関して、個人に主観的に実感されるのは「居場所がない」という形においてであるという点を考慮し、「居場所のなさ」について検討するのが重要であるという視座に立ち、考察した。

従来の研究においては、「居場所のなさ」を感じる状況や、「居場所のなさ」と心理的特性などの関連について考察されていたが、「居場所のなさ」が本質的にどのような事態であるのかは十分に明確にされているとは言えなかった。そこで本研究では特に「居ること」に着目しながら、「居場所のなさ」について考察した。その結果、居場所がないと感じられている状態、つまり、個人にとって“「居ること」ができる場所がない”と感じられる状況においては、物理的身体的に交換可能な存在として「在る」ことと、交換不可能で個別な〈私〉として「居る」ことの二重の存在様式の間揺らぎが顕在化しており、個人の実存にとって危機的な状況であることを指摘した。更に、「一人でいる居場所」がないことについても考察を行い、「一人でいる居場所」がないことの背景には、Winnicott, D. W. (1965) の「一人でいられる能力」が個人に十分に獲得されていない可能性があることを指摘した。

心理臨床の場において、「居場所のなさ」というテーマに出会うことは稀ではない。その際、本研究で述べたような「居場所のなさ」の性質、すなわち、物理的身体的に交換可能な存在として「在る」ことと、交換不可能で個別な〈私〉として「居る」ことの二重の存在様式の揺らぎが顕在化しているという性質は、クライアントを置かれている状況を理解する一つの視点となりうると考えられる。

本研究ではあくまで理論的な観点から考察を試みたため、実証的な知見を今後積み重ねて

いく必要があり、どの程度臨床実践のリアリティに沿うものであるかについても、今後の検討を待たねばならない。

引用文献

- 廣井いずみ (2000) : 「居場所」という視点からの非行事例理解 心理臨床学研究 18(2), 129-138
- 石本雄真 (2009) : 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(1), 93-100
- 木村敏 (1972) : 人と人との間 弘文堂
- 木村敏 (1994) : 「居場所について」 (磯村新・浅田彰編 (1994) : Anywhere 空間の諸問題 NTT 出版株式会社)
- 北山修 (1993) : 自分と居場所 岩崎学術出版社
- 文部省 (1992) : 登校拒否 (不登校) 問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して (学校不適応対策調査研究協力者会議報告) 教育委員会会報, 44, 25-29
- 村瀬嘉代子・重松正典・平田昌子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文 (2000) : 居場所を見失った思春期・青年期の人びとへの統合的アプローチ 通所型中間施設のもつ治療・成長促進的要因 心理臨床学研究, 18(3), 221-232
- 妙木浩之 (2003) : 「心の居場所」の見つけ方 面接室で精神療法家がおこなうこと 講談社
- 中原睦美 (2002) : 受診が著しく遅延した重症局所進行乳癌患者の心理社会的背景の検討 依存のあり方と居場所感をめぐって 心理臨床学研究, 20(1), 52-63
- 中村泰子 (1999) : 「居場所がある」と「居場所がない」の比較—○△□法の基礎研究として— 家族・児童相談所紀要 16, 13-22
- 西村喜文 (2000) : 重症心身障害者へのコラージュ療法の試み コラージュ療法の意義について 心理臨床学研究, 18(5), 476-486
- 則定百合子 (2006a) : 思春期における「こころの居場所」に関する研究 神戸大学発達科学部研究紀要, 13(2), 105-115
- 則定百合子 (2006b) : 思春期の心理的居場所感と抑うつ傾向との関連 神戸大学発達科学部研究紀要, 14(1), 9-13
- 岡田光夫 (1998) : 居場所がないと訴える中年男性との精神療法——幻の At Home を求めて—— 精神分析研究, 42, 5, 602-607
- 萩原建次郎 (2011) : 子ども・若者の居場所 (高橋勝編著 (2011) : 子ども・若者の自己形成空間 東信堂)
- 小沢一仁 (2002) : 居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み 東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編 25, 30-40
- 小沢一仁 (2003) : 居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと 東京工芸大

- 学工学部紀要. 人文・社会編 26(2), 64-75
- 杉本希映(2010): 中学生の「居場所環境」と精神的健康との関連の検討 湘北紀要, 31, 49-62
- 杉本希映・庄司一子(2006): 大学生の「居場所環境」と自我同一性との関連—現在と過去の「居場所環境」に対する認知との比較を中心として— 筑波教育学研究, 4, 83-101
- 杉本希映・庄司一子(2007): 子どもの「居場所」研究の動向と課題 カウンセリング研究, 40, 81-91
- 住田正樹(2003): 子どもたちの「居場所」と対人的世界(住田正樹・南博文編(2003): 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 pp. 3-17)
- 鈴木信子(2005): 夢を語り続ける女性との面接 心理臨床学研究, 23(2), 233-243
- 高橋晶子・米川勉(2008): 青年期における「居場所」の研究 福岡女学院大学大学院紀要: 臨床心理学 5, 57-66
- 田村絹代(1996): 居場所を求めて転々とした後、母親と同一の所属を選択した同一性拡散の症例——その病理と治療関係について—— 精神分析研究, 40, 3, 228-233
- 富永幹人(2006): 居場所: 妙木浩之編(2006): 日常臨床語辞典 誠信書房
- 堤雅雄(2002): 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱 島根大学教育学部紀要, 人文・社会科学, 36, 1-7
- Winnicott, D.W. (1965): The Maturation Processes and the Facilitating Environment (牛島定信訳(1977): 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社)
- 矢幡久美子(2003): コラージュの中の文字表現 居場所探しのテーマ 心理臨床学研究, 21(5), 450-461

本論文を執筆するにあたり、ご指導いただきました京都大学大学院教育学研究科桑原知子教授に深く感謝申し上げます。

また、本研究は文部科学省グローバルCOEプログラム(D07)の助成を受けた。

(心理臨床学講座 博士後期課程3回生)

(受稿2011年9月2日、改稿2011年11月25日、受理2011年12月26日)

A Study of the Feeling that One does not have “*Ibasho*”(A Place where One can be)

NAKAFUJI Shinya

The present study aims to consider the feeling that one does not have “*Ibasho*” (a place where one can be): what is the essential meaning of the situation that one does not have “*Ibasho*”? This subject was discussed with reference to embodiment. It was clarified that when one feels that one does not have “*Ibasho*,” one’s body exists in space, whereas one’s consciousness as “I” feels that it cannot stay there. That is, there is a conflict between one’s “existing” as a body and “being” as “I,” and this conflict is critical for one’s existence. Moreover, the situation that one cannot have “*Ibasho*” without others was also discussed about. To have “*Ibasho*” without others, it is necessary to acquire the “Capacity to be Alone.”